

## 新潟祭りの歴史と現代の祭り意識

富山秀子

最近テレビなどで「祭り」を取りあげることが多くなってきた。しかしそれらは、捉え方の点で色々に違っている。そういったものを見たり聞いたりしている人達は、どの様に「祭り」を受け止めているのだろうか。

現代人の「祭り」意識を知るのに、郷里新潟の「新潟祭り」を知ろうとした。

この新潟祭りを調べて行くと、新潟における各神社の関係、あるいは祭りと権力者との関係などが明らかになって来た。

新潟市には古くから、新潟の総鎮守である白山神社がある。

この白山神社は平安時代初期、延喜年間頃に創られたもので、その歴史は古い。主神は菊理媛大神ツクリヒメノカミ・伊装諾大神・伊装册大神の三柱で、伊装諾大神と伊装册大神は夫婦神で、この縁を結んだのが菊理媛大神であるといわれている。

これらの主神の他に、現在配祀神が二柱、合祀神が九柱あるが、これらの配祀神・合祀神十一柱は、明治六年以前までは境内に、摂社、末社として祀られていた神々である。何故この様に多くの末社が存在したのかと思われるが、新潟の在り方を考えると、白山神社が新潟の成長・発展と共に歩んで来た事が良く分かる。

この白山神社の合祀神のひとつ、住吉ノ神は元々新潟で大きな力を持っていた。

江戸時代初期、新潟の町はいよいよ湊として発展して来るのである。これは寛文年間（一六七二年）に、幕府の命を受けた河村瑞賢が西廻り航路と東廻り航路を開いた為であり、この航路は米の産地と消費地を結ぶもので、

消費地とは江戸・大阪のことであった。新潟は西廻り航路のひとつで、西廻りとは日本海沿岸から下関海峡を通じて、瀬戸内海に出、大阪に至る航路であった。そして十八世紀に入ると、これらの航路は盛んに利用されたのである。

延宝八年（一六八〇年）六月二十日、新潟の海辺に住吉ノ神を祀るところの湊元神社が、時の廻船問屋網干屋によって創建された。住吉ノ神は三柱あり、底筒之男命・中筒之男命・表筒之男命で、この神々を墨江三前大神といっており、この他に息長足姫尊も祀られている。

この住吉ノ神は海神で、海路の安全を守る神である。すなわち住吉ノ神は海路安全の守護神であった。よって湊として栄えた新潟において、新潟湊の守護神として崇敬されていた事は理解出来る。

現在新潟市で行なわれている「新潟祭り」の元は、この湊元神社が行っていた「湊祭り」であった。

江戸時代中期に入ると新潟は、湊としてめざましい発展の中であった。この発展を住吉ノ神に感謝し、又今後発展を祈願しようと、湊元神社の社掌でもあった網干屋が、享保十一年（一七二六年）に初めて神輿を巡行させる祭りを、湊祭りと呼び行つたのである。しかし網干屋は、単に神に感謝するのではなく、民衆を住吉ノ神に引きつけるには、祭りが一番と考えたと思われる、即ち経済的に権力を持つ網干屋が、宗教的にも権力を握り、民衆を屈服しようとしたと考えられる。

この様にして新潟は、一層湊として発展し、湊祭りや湊元神社は人々を引きつけたのである。発展の裏には常にトラブルが存在するもの、これらの発展の裏にもトラブルは多かつた。

新潟湊がその黄金時代に入ると、信濃川をはさんで西の新潟側と、東の新発田藩領の沼垂側との間で、湊の所属問題が、延宝八年（一六八〇年）、元禄十年（一六九七年）、元禄十二年（一六九九年）、享保十一年（一七二六年）の四回に亘って起つたのであるが、いづれも新潟側の勝利となつた。

この問題の起つている頃、東側の沼垂では春・夏・秋と、各神社においては神輿をかつぎ出し、賑やかに騒ぎ

廻っていた。特に蒲原神社の蒲原祭りが名高く。

この蒲原神社は、正式には五社神社といつて、火の神（植山姫命）・水の神（水波院命）・木の神（久々廻智命）・金の神（金山彦命）・土の神（迦具土命）の五神で、農業の神といわれている。祭りの起源は鎌倉時代からといわれ、豊作か凶作かの託宣が行なわれていた。これを見た新潟側は、沼垂側に負けるものかという意気込みから、年一回しかない湊祭りを全町民のものとし、規模も大きく、盛大に行つたのである。

当時は、今の様に信濃川に橋はなく、川幅も広がった為、西と東の往来は船による他なく不便なものであった。又東側の沼垂はあのすばらしい蒲原平野の中にあり、その大部は農業を行つていた、そして西の新潟は湊町として商業が発達していた。この様な交通の不便さや、宗教的にも産業的にも、まったく違ったものが互いに発展していたという事が、なにかと西と東の間に争いが起つた理由のひとつと思われる。

湊祭りと共に、あるいは新潟の湊と共に発展して来た湊元神社にもトラブルはあつた。それは新潟の総鎮守白山神社との間に、弘化五年（一八四八年）・明治十三年と二回に亘つて、訴訟問題が起るのである。しかし明治元年、五港のひとつとして開港された頃、すでに湊は土砂の埋没で浅くなり、湊の衰退は日々その度を増して行つた。そしてその衰退は湊元神社も同様であり、ついには明治四十二年十二月、湊元神社はその姿を消し、白山神社に合祀されたのである。

この白山神社と湊元神社のトラブルは、即ち土着神と外来神との関係問題として問題となつてゐる。古来、日本人の信仰は八百万の神といわれ、多くの神が存在した。それらの神々が色々な形で争い、また土着神と外来神の間に争いが多かつたことは否定出来ないし、土着神よりも外来神が民衆を、より引きつける様になると、その争いは一層激しいものになつたと思われる。土着神としての白山神社と、外来神としての湊元神社の争いは、その一例であろう。この外来神としての住吉ノ神は、当時の新潟の人々にとっては、白山神社が祀る神よりも魅力のあるものであり、必要であつた。だから人々は白山神社から湊元神社へと、その信仰の対象を変えて行つた

のである。そこで湊元神社は網干屋に代表される経済力を有していた事になる。そしてこの経済力は政治的な方面をも左右出来た。これは、新潟が湊町として発展していたからこそ、湊元神社が力を持てたのである。しかし湊元神社の魅力が失なわれて来ると、即ち新潟湊が湊としての機能を失ってくると、人々は湊元神社から離れていった。そして結局湊元神社は白山神社に合祀されてしまったのである。

これらのことは、日本人の信仰・神というものが持つ融通性を示しているように思える。

合祀されてからも湊祭りは氏子の手によって行なわれていたが、湊祭りの名は人々からしだいに忘れられ、その姿を大きく変えて行った。

昭和二十二年、この頃八月二十二日・二十三日の両日は、湊祭り・川開き・商工祭・開公記念祭が別々に行なわれていたが、これをひとつにまとめて、新潟祭りとして行うことになったのである。

そして現在、八月二十日・二十一日は前夜祭として民謡流しなどが行なわれ、二十二日・二十三日には山車と花火が行なわれ、何度か争ったことのある、現在新潟市に含まれている沼垂側へも神輿が入り、祭りは全市をあげての祭典となっている。

湊祭りが新潟祭りへと変って来たその変遷は、新潟市の歴史と共にあった。新潟が湊として発展していた時に始まり、時代の経済状況・政治状況と共に、時には絢爛豪華に、時には中止になって、そして新潟における色々な祭典といっしょになって、現在の様な新潟祭りとなったのである。

しかし新潟市民は、新潟祭りが湊祭りであったことなど知ってはいない。

現在の新潟祭りは商工祭の色濃い、カーニバル的なものになっているが、市民は十分楽しんでいられると思われ。だが市民は単に楽しさだけしか感じていないのだろうか、否、それだけではない。新潟祭りは市民に安心感の様なものを与えていると思われる。市民はその事には気づいていないが、祭りを見る時、市民は全くの所、無防備で安心しきっている。又そんな姿に気づかないからこそ、安心出来るのかもしれない。

例えば、こんな事が新潟祭りの花火の夜にあった。それは東京に出ている人が、祭りに帰って来たらしく、新潟にずっと居る友達に対して、花火を見ながら静かに、静かに身の上話しをしていた、その身の上話しは決して幸福そうなものではなかったが、その話し声は暗くはなかった、その声は本当に静かに、まるでこの世に怖いものはない様に、安心しきって語られていた。

これが祭りの夜でなかったら、美しい花火を目の前にしていなかったら、こんなにも静かにやさしく語られていただろうか。

祭りとは、本来神に対するものである。しかしその意味が失なわれている新潟祭りにも、祭りが有している要素が、まだどこかに残っている様に思われる。

新潟市民に限らず、現代人はどの様に祭りを受け止めているのだろうか。

現代、それは合理化・情報化・科学の時代である。それらによって生活のすべてが左右され、それが失くなら一日たりとも生活出来なくなる。しかしこれらのものすべてが生活を良くしている訳ではない。自然破壊・食糧危機・人口問題・核戦争・そして公害と、人々の意に反するものが今、現代社会には次々と現われて来ている。

この状況のもとにおいて、人々は危機感や不安感を強くいだいて居る。しかし人々は現代社会から逃れられずに居る。人々の心は矛盾で満ちて居るのである。

何故この様に矛盾するのか、これは現代人の外面的・表面的・主観的なものの考え方、受け止め方から来るのである。

合理化や情報化・科学を、客観的にかつ内面的に理解する事なく、目先のものに左右され、現状を見つめず、それらから逃避するばかりである。そして安心や安定を願いながら、今はやり場のない不安と恐怖によって、暗中模索している状態なのである。

こういつた現代人の祭りの受け止め方は、やはり表面的で主観的なものである。

情報化時代で、祭りを知る機会は多くなつた。しかし、それが祭りを真の姿で伝えているとは思われない。情報化によつて、かえつて祭りの姿は変えられ、いつそ観光の色が濃くなつたと思われる。だが情報化時代の祭りの復活は、祭り本来の意味を失つていながらもかわらず、人々を引きつけている。

何故なら、情報化によつて強調されている伝統・郷愁・情緒・楽しさは、現代人の持つ不安や恐怖を解消するには、十分その役割をはたせるからである。そして人々は表面的に祭りを考へて、祭りに逃げ込むのである。

しかしここで問題なのは、表面的にみた伝統・郷愁・情緒の中に、祭りが古来より有していた、安心・安定の要素が存在するのではないかということである。対象としての神が明らかになつてこそ、安心安定の要素があると思われようが、そうである。

ある意味において、現代人は祭りの中に神が存在すると信じている。それが神だとはだれも気づいてはいないかもしれないが、しかしそういった神の様な対象を求めているのではないだろうか。そしてその様なものが、祭りの中にあると信じている。これは現代にみる、一種の神への信仰であり、現代人はこれを信ずるところの信者であると、そう考える事も出来るのではないだろうか。

この様に考えると、現在の祭りも、十分に安心・安定の要素を持ち、現代人の祭り意識が表面的に、情緒的なものと思われているのは事実であるが、現代人は祭りの中に期待を持ち、又その中で安心感を得ていると思われ

る。  
祭りに対する多くの考え方、受け止め方がある中で、その対象が神であつた事は否定出来ないし、又その神に對しても多くの論議があるが、自然を神とみなしているものが、古来より日本には多い。

自然は人々に恐怖と恩恵をもたらした。そこで人々は自然の成り行きにまかせ、足なみを揃へ、その結果生まれた姿が祭りや祀ることの様に思える。即ち恐怖と恩恵の対象を神として祀り、祭りを行ふ事によつて人々は恐

怖から逃れ、恩恵を大なるものにしようと願った。

それが安心感・安定感を得るといふ事であつたと思われ、現在も変わることなく祭りの中に存在する祭りの要素だと思われる。

そして又、集団に於いて、集団の安心感・安定感を得る為に行なわれている祭りは、ここで集団の意識・団結力を高めるといふ要素を持つことになる。

しかし、祭りの持つ安心・安定の要素、集団の意識・団結力を高めるといふ要素、これら二つの要素は、非常に高い危険性をもつと思われる。

それは新潟祭りの歴史の中にも見られる。

廻船問屋として経済的権力を持つ網干屋は、政治をも左右するのは可能だつた、そこで宗教的にも権力を握り、人々を動かそうとして、人々を夢中にさせる祭り、あるいは宗教・神に目をつけ、自分の手でそれらを動かした。これは、時の権力者、それは政治的・経済的・あるいは国家的であれ、権力者によって、祭りの持つ要素が、彼らの優位性獲得・維持の為に利用されて来たのではないかといふ事である。

祭りや祀るといふことの中に秘められている要素は、人々に取って魅力があり、人々はそれに引きつけられる。だからこそ権力者がそれに目をつけ利用する。この意味において、危険性があると思うのである。

だが日本の歴史の中で、長く培われて来た祭りを考える時、私たちはその要素を強く印象づけられる。そして、その要素は今も昔も変わる事なく祭りの中に存在し、人々を魅了する。

現代の祭りが、単に観光化され、人々も表面的なものだけを求めているとみるのは、あまりに一方的な見方ではないだろうか。